



鐘の音

NO. 15

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2020.02.06

記録者

教職実践専攻長(教職大学院)

教授 佐藤 学

正月恒例となった箱根駅伝は、青山学院大学が10時間45分23秒の大会新記録で2年ぶり5回目の総合優勝を果たしました。様々に注目する点があったわけですが、私は、青山学院大学が打ち出した記録に注目しました。これまでの大会記録は、東海大学が昨年マークした10時間52分9秒です。昨年も驚きの記録であったわけですが、今年さらに7分近くも記録更新していることは、驚かされます。記録への注目は派生して、トレーニング方法、選手育成、高速シューズなど、話題はしばらく尽きない様子です。

それは、なぜか。

我々人間の精神がよりよいものを希求するからであります。

そうさせる1つの仕組みが、「記録」です。今回は青山学院大学が弾き出した10時間45分23秒が過去の記録を大幅に塗り替えている記録だからです。箱根駅伝が関東学生陸上競技連盟の1大会であるとはいえ、我々人間が目にしたことのない世界に、この記録が導いてくれているからです。現時点での、我々人間の最高点であるからだと思います。それぞれの大学チームにドラマはあったと思うのですが、来年の箱根に向けた練習において目指す記録は、この記録だけです。

記録とは、最善のかたちで残されるべきものだと思います。中途半端なものは、直ぐにかき消さ

れます。長く長く記録されるものは、多くの人間に目標を与え、努力する方向へ導いてくれます。

院生の皆さんが行っている教育実践研究報告書も同じです。日本の学校教育を変えると大言する必要はありませんが、皆さんと協働して学校の問題解決にあたろうとする同士に、中途半端なアプローチは皆を振り回すだけです。少しでも、洗練したかたちで提案していけるよう、推敲してほしいと思います。

推敲ポイントの1つが、研究主題と研究目的です。報告書のページ数やポスターの紙面を埋めるため、この2点を疎かにすることがよくあります。取り組んできたことは数々あっても、それらを全て盛り込むことではありません。そうすることは、怠惰または自己満足のどちらかです。明日の実践を共に拓く同士のことを考えていません。明日の実践を切り拓くことができるようにするためには、エッセンスに絞り込む苦しい作業が必要です。エッセンスこそが、次の研究、次の実践に向けての原動力となります。

なぜこのような研究に取り組んだかの動機、問題の背景、問題設定の理由などが、研究主題と研究目的から明らかになるようにしてください。

次の実践研究を挑戦的に進めるためにも、残された時間を大切に使うしてほしいと思います。

ドローン1号機物語

教職実践専攻(教職大学院)

特別教授 廣嶋 徹

私の退職後の目標の一つにラジコンで模型の零戦を飛ばすことがあります。まだ、実現できていませんが、その前段階の練習として、今注目され始めたドローンを飛ばすことを決めました。

某通販サイトを利用し、初心者向けのドローンを発注し、6月24日に着荷しました。私にとっては記念すべきドローン1号機となり、その日の夜に初フライトを試みましたが、悲惨な結果となりました。以下にその詳細を述べたいと思います。

夜のフライトとなったため外では飛ばせず、当然自宅内でのフライトとなり、2階のリビングでフライトすることにしました。リビングにした理由は天井が高いこと、ある程度広いことが主な理由でした。しかし、リビングには大型液晶テレビが鎮座しており、家内から「テレビにドローンがぶつかったらパネルに傷が付くから絶対ぶつけないように！」ときつく言われていました。「大丈夫、ぶつけないように操縦するから。」とは言ったものの、初めてということもあり一抹の不安がありました。一応、マニュアルやネットの動画で基本的な操縦の事前学習はしていたので、ある程度の自信はあったのですが・・・。

ドローンの正面(機首)を自分の方に向けて離陸、安定してホバリング(一定の高さで静止する状態)するはずだったのですが、なぜか勝手にテレビのある右の方に向かって飛んでいきました。そのままではぶつかると思い、送信機のレバーを左に倒すと、なんとドローンが逆の右の方に飛んでいってしまい、見事にテレビに激突、緊急停止の方法も知らないまま墜落したドローンに駆け寄りました。結果、テレビのパネルには複数の傷が付き、家内からはこっぴどく叱られ、「ドローンリビング飛行禁止令」が出されました。

意気消沈したまま自分の趣味の部屋に戻り、な

ぜ、思った通りにドローンが操縦できなかったかを省察しました。再度操作マニュアルを見直した結果、重大な間違い(思い込み)をしていることに気が付きました。

それは、全くの基本的・初歩的なミスでした。ドローンの正面(機首)を自分の方に向けて(文中ゴシック体)がそもそもの間違いだったのです。正しくはドローンの背面(機尾)を自分の方に向けて操縦しなければならなかったのです。そのため、前後左右の送信機のレバー操作が全て逆になり自分の意志とは逆の方向にドローンが飛んでいってしまったのでした。

それでは、なぜ、ドローンの正面を自分の方に向けてしまったのか?理由は簡単、ドローンの機首にカメラが取り付けられており、カメラのレンズは自分の方を向いているのが当たり前だという固定観念があったからでした。

撮影者と被写体の関係でカメラのレンズの向きはどうなっているのかを正しく認識していませんでした。ドローンを操縦する時は撮影者のレンズの向きになっていなければならない、ドローンと操縦者の一体化ができていなかったということになります。

その後、同じ失敗を繰り返すことなく、操縦の練習をして操作技術を磨き、現在6機のドローンを所有しています。全て航空法や電波法の規制を受けない200g未満のトイドローンと呼ばれる物です。しかし、6機とも機種が違い、大きさや性能、送信機も違います。

そのため、基本的な操作は同じですが、それぞれの機種に合った微妙なレバー操作をしないと、思った通りの動きや性能を発揮してくれません。

新しいドローンを購入するたびに、新しいドローンのクセを掴むために何度も操縦の練習をして

います。屋外でのフライトが基本なのですが、ほぼ毎日リビングでも練習をしています。ただし、もう、テレビに激突することはありません。

今後、また、何機かドローンを購入するかもしれませんが、最終目標である零戦を自由に大空で操れるよう、段階を踏んで操作技術の向上を図りたいと考えています。

さて、最後になりますが、クリスマスの皆さん、本稿を通して私が皆さんに何を伝えたかったかお分かりでしょうか？分かった方も分からなかった方も研究室においでください。書き切れなかったエピソードも含め、大いに語り合しましょう。お待ちしております。

宮城研修旅行 1 日目

学校マネジメントコース

現職院生 1 年次 加賀谷 武英

10月25日(金)午前9時。大学正門から大型バスでの出発時には秋晴れにも恵まれ、現職院生10名とクリスマス2年次5名、1年次4名に引率教員である佐藤修司先生、佐藤学先生、秋元卓也先生も同行され、総勢22名での研修旅行が始まりました。昨年の研修旅行は岩手県が訪問の中心でしたが、今年は宮城県を訪問地とし、平成23年の東日本大震災における被災地の復興の現状と危機管理について、事前学習をして臨みました。また、宮城教育大学教職大学院と交流を深めました。

東北自動車道前沢SAにて少し早めの昼食をとり、まずは震災遺構旧仙台市立荒浜小学校に向かいました。高速を降りてから荒浜小に向かう道路周辺は整然と整備が進み、道路からの風景には人家などあまり見られません。見慣れない何か異様な景色が続く中、4階建ての立派な小学校がポツンと取り残されたように立っていました。現状からも、遠目にはしっかりした建物のように見えていましたが、海岸から700m内陸部に位置する校舎の外観にも津波の痕跡があり、2階の床上40cmまで

激しい浸水がありました。地震発生から40分後には学校の周りの家などの建物は津波で跡形もなく流され、児童と近隣の住民320名が3階と4階に避難したそうです。17時半から一度に5名しか運べないヘリコプターでの救助が始まり、全ての子どもの救助が完了したのは翌朝5時でした。厳しい状況の中、多くの方がお互いに譲り合い、支え合い、励まし合ったことが、ここ荒浜小で犠牲者が出なかったことにつながっているのだと実感しました。

宮城教育大学教職大学院は初めて訪問しましたが、東北大学工学部とも隣接し、学問の街という空気に包まれていました。現職とクリスマスに分かれてグループワークを行い、それぞれの研究テーマについての情報交換をしました。その後、萩朋会館(食堂)に会場を移した交流会では、多くの院生の方と言葉を交わし、短い時間でしたが有意義な時間とすることができたと思います。外は冷たい雨が降っていましたが、心はほっこりと温かったです。

宮城研修旅行 2 日目

学校マネジメントコース

現職院生 1 年次 仙道 英悦

2 日目に訪れた大川小学校跡地は、最高裁での判決が下された直後の視察ということもあり、震災遺構となった校舎、大勢の子どもたちや町民が津波に飲み込まれた川沿いの道路、校舎裏の丘陵が、多くのことを語りかけていたような気がしました。校舎裏の森林や丘陵に登り校舎後を見下ろしながら、案内していただいた徳水先生の「なぜここに避難しなかったのか?」「どうして川に逃げたのか?」という言葉が胸に突き刺さりました。大川小学校では、明確な防災マニュアルを作成しておらず、避難経路も共通理解がなされていなかったようです。前日視察した荒浜小学校の震災遺構でたまたま居合わせたご年配の方が、「荒浜の子どもたちは助かったが、大川の教師たちは子どもたちの声を無視しやがった」と憤っておられたことを思い出し、我々教員は多くの子どもたちの大切な命を預かっていることを常に念頭に置いておかなければならないと、改めて考えさせられました。

徳水先生の復興教育講話を拝聴し、最初に感じ

たことは、たとえ心理学上の裏付けがあったとしても、震災のわずか 2 年後に小学校の児童を震災の記憶と向き合わせるということは、相当の覚悟が必要だったのではないかと思います。旅行前の事前学習で視聴した防災教育のビデオの中で片田先生がおっしゃっていた、『たとえ災害の起こった地域であっても、その地域で生きていく「作法」を学ぶことが防災教育の第一歩である』という言葉が浮かび、まさにその通りの実践だと感じました。地域で生きていくことの「作法」を学び、地域を支えともに伸びていく力強い子ども達の姿がそこにはありました。

その後を訪れた雄勝ガーデンファクトリーは、残念ながらバラの季節は去ってしまっていたのですが、隅々まで手入れの行き届いた素敵な庭にしばし心が癒されました。「北限のオリーブ」は、現在のところ 140 本植えられているそうですが、事業として成立させるには最低でも 500 本は必要だということでした。石巻ブランドのオリーブをいつの日か口にできることを期待しています。



被災した当時の状況を物語る大川小学校跡地



徳水先生の説明を聞く院生



北限のオリーブ



大川小学校跡地に残された卒業制作

宮城研修旅行 3 日目

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 1 年次 本田 和也

3 日目の日程は、南三陸ポータルセンター前で語り部さんから南三陸地域での震災の様子や、南三陸町防災対策庁舎などについてお話をお聞きしました。その後は南三陸ポータルセンターで自由行動をし、昼食では南三陸の「志のや」というお店で海鮮丼を食しました。

語り部の方からは、震災から 8 年が経ち、復興工事が進み、被災したまま遺る建物も少なくなっている現状から、被災の状況が目に見えづらくなっている今だからこそ、語り部として当時の様子や思いを伝える活動をされている想いを感じ取ることができました。

ポータルセンターでは、地元の名産品などを探しました。また、散策していると秋田の南外地域の中学校と「南三陸さんさん商店街」がコラボレーションをしていることを知りました。距離にして 200 キロ以上離れているこの地でも、秋田との繋がりがあることがわかりとても嬉しく感じました。

またコラボレーションつながりで、自由時間に主にストマス 1 年次のメンバーでポケモン GO を嗜みました。実はその時期に、宮城県とナイアンティック社が作成したスマートフォンの位置情報を利用したアプリケーションであるポケモン GO が、被災地観光復興の支援としてコラボレーションをしていました。その時に、普段なかなか目にするのでできないポケモンである「ラプラス」が出現しやすくなっていました。ラプラスとは、優しい心の持ち主で、滅多に争うことがないポケモンです。この震災復興のシンボルとして、とてもあっていると感じました。また、アプリケーションだけでなく、グッズとしてもポータルセンターの数店舗で売られていました。地元の資源を用いて観光地として PR していく姿に感銘を受けました。きっかけが何であっても、震災について、被災について関心を持ち次の世代につなげていく。我々教育者の卵もそういった姿勢を見習い、これからも勉強に励み成長していきたいです



南三陸盛土工事の様子



海鮮丼をいただきます！



語り部さんのガイドで旧戸倉中学校へ



ラプラスの写真立て

CTによる道徳科指導力向上研修会

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 2 年次 佐々木 浩子

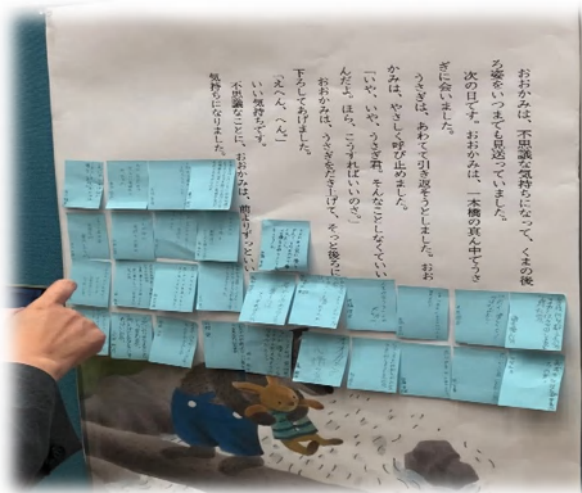
10 月 28 日に横手市で行われた、南教育事務所主催 CT (コア・ティーチャー) による道徳科指導力向上研修会に参加してきました。授業会場は横手市立横手北中学校、協議会は浅舞公民館でそれぞれ行われました。授業で生徒たちは、小学校 1 年生の時に道徳で扱った『橋の上のおおかみ』を中学校 1 年生でもう一度読み直し、「思いやり」について小学校 1 年生の自分と今の自分との考えの変化を踏まえながら考えていました。「自分の考える思いやりとは何か」について、『思いやりを考える上で「難しいな」と思うこと』についての事前アンケートの集計結果や、今回扱う読み物教材を基に、生徒が考えたことや疑問に思ったことなどを付箋紙に書いて貼ってあるものが掲示されており、授業提示してくださる教師の用意周到さに驚くとともに、生徒たちの「思いやり」に対する意識づけが図られていました。

また発表した生徒が次に発表する生徒を指名して、それぞれの意見を漏れなく教師が板書してい

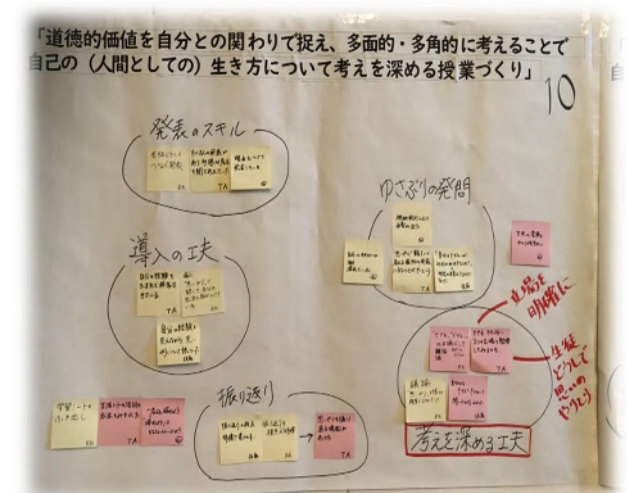
ました。そして区切りのいいところで教師が介入していました。教師の学級経営と、道徳の授業の積み重ねがあつてこそ、実現している研究授業なのだと感じました。

協議会では、グループに分かれて「道徳的価値を自分とのかかわりで捉え、多面的・多角的に考えることで自己の(人間としての)生き方について考えを深める授業づくり」というテーマの下、話し合いが行われていました。よかった点は黄色の付箋紙、改善点は赤色の付箋紙に書かれ、それらを分類して、1 枚の模造紙にまとめられていました。私たち学部卒院生は参観者として、グループ協議をそれぞれメモしながら、現場教師の目線や考えを学びました。

今回の CT 研修会を通して、授業と協議会に参加し、現場教師の学び続ける姿、私たちが継承すべき秋田の授業、秋田の教師の姿に触れることができました。今回の経験を活かすため、日々理論と実践の往還に努めていきたいと思ひます。



生徒の意見が可視化された教材



協議会での授業分析

「八峰町巡検」を終えて

学校マネジメントコース

現職院生 1 年次 大山 正道

令和元年 10 月 19 日土曜日、「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発」の講義の一環として、「八峰町巡検」が行われました。この巡検のねらいは、八峰町で地域の地形、生態、人々の暮らしとの関連について考え、様々なふるさとの事物は相互に関連し合っていることに気付き、自分の調査の参考とするものです。当日はあいにくの雨ということもあり、訪問場所を変更しての巡検となりました。参加者も教員 4 名・現職 2 名・ストマス 4 名と例年よりかなり少人数でしたが、豊かな地域資源を通してたくさんの学びがあり、自分の調査活動の参考となりました。

「はたはた館」の売店では、お土産の産地を確認して他の地域とのつながりを学びました。「ブラックサンドビーチ」と「八盛鉱山跡地」では、黒い砂浜の由来や露天掘りの跡地からかつての栄えた鉱山と廃棄物処理の歴史を学びました。「岩館漁港」では、水産加工場の設備や漁船の番号の由来を学

び、自然環境と産業の関連を学びました。昼食は「八森観光市」で、それぞれ新鮮な魚介類を堪能しました。「ぶなっこランド」では、日本最初の世界遺産である白神山地の貴重な生態系や、ブナ原生林の役割や貴重さを学びました。「白瀑神社」では、滝の荘厳さ、神社の神々しさに触れ、豊かな自然とそこから生まれた信仰について学びました。

「山本合名会社」では、製造過程を見学し、地元の自然と素材を生かした日本酒造りを学びました。

「ネクスト 5」として人気のある「山本合名会社」の地酒を購入した人も多くいました。

八峰町の豊かな地域資源の巡検を通し、そこに住む人々が地域の立地や特長を生かして暮らしを成り立たせていることが実感できました。今回はたまたま八峰町でしたが、場所を変えても地域資源を発掘し、ふるさと教育に結び付けられる視点やヒントをたくさん学ぶことができました。

2019 忘年会

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生 2 年次 高橋 峻介

12 月 26 日、秋田市大町の大町共同ビルにて教職大学院の忘年会が執り行われました。はじめに、佐藤修司先生からご挨拶を賜りました。今年を振り返るとともに来年への期待がこもった佐藤修司先生の挨拶に身の引き締まる思いでした。佐藤先生の乾杯のご発声とともに歓談の時間となりました。後期に受講した講義や、先輩方のインターンシップでの体験、研修旅行をはじめとした行事で得た思い出などの 1 年間の頑張りや、楽しかった出来事、苦しかった出来事などを話題に、話に

花が咲いていました。今年の企画は、2019 年の五大ニュースの発表をクイズ形式で行いました。事前に大学院関係者にアンケートを実施し、企画班が集計した中で上位 5 つを発表しました。クイズの話題について、到るところで会話が盛り上がっていました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、最後は武田篤先生の締めの乾杯。2019 年を良い形で締め、2020 年が教職大学院にとって、各人にとって深い学びのある、実りある 1 年になることを願って、大きな拍手で忘年会が終了しました。

どのような出来事にも、学ぶ部分は存在します。講義はもちろん、忘年会での会話もその例から外れません。何を持って学びとするか、何からでも

学びとる姿勢は持っているか。さらに自分の考えが深まった忘年会でした



スピーチをする本田和也さん



良い笑顔



みんなでポーズ！



企画班お疲れ様でした

足で稼ぐで精選する

カリキュラム・授業開発コース

学部卒院生 1年次 沼田 充貴

本教職大学院には、2年間を通じて実際の学校現場で経験を積むことができる「教職実践インターシップ」があります。学部卒院生の1年次は、「インターシップⅠ」を履修しています。前期インターシップでは、附属4校園での実習の中で各校種の現状や課題、児童生徒の実態の違い等を学びます。そして、後期インターシップでは、附属4校園における各自の志望校種で研究テーマに沿った授業実践の機会を得られます。

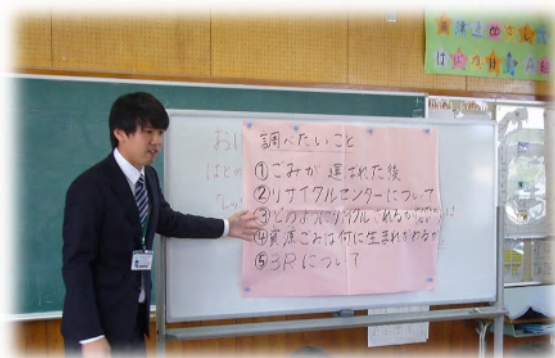
私は、秋田大学教育文化学部附属小学校で後期インターシップを行いました。配属は3年生の学級で、「ごみのしまつと活用」という社会科の単元を全5時間にわたって授業実践しました。

「社会科は足で稼ぐ」という言葉は、本教職大学院に入学して初めて聞いた言葉でした。最初は、その意味がいまひとつぴんと来ていませんでしたが、今回の授業づくりにおける教材研究で身に染みて分かりました。

「ごみのしまつと活用」の授業づくりのために、秋田市の溶融施設とリサイクルプラザには4回行き、見学・質問をしました。子どもたちはどのようなことを疑問に思うのか、風景や人、物をどう撮影し提示すれば驚くのかということを考えながら行った取材は良い経験となりました。他にも秋田市環境部やスーパー等、協力してくださる外部機関との連携を図りながら、家庭ごみや資源ごみの処理の工夫について情報収集を行いました。これによって学んだ知識は、あくまで「ごみのしまつと活用」の単元に関することかもしれませんが、足で稼ぐという経験は他の単元にも共通することであったと考えています。

足で稼いだ情報は膨大です。子どもたちが驚くような教材、子どもたちが考えるしかけになるような教材が数多く集まります。どれも良いものなので、つい授業で使いたくなります。しかし、

45分という限られた時間の中で、扱えるのはごく一部です。今回の実践の課題の一つにはタイムマネジメントが挙げられました。足で稼いだ膨大な情報を子どもたちの学びにつなげるために必要なのは「精選」であるということ学びました。来年度の「インターンシップⅡ」に活かしていきたいと思います。



児童の調べたいことリストを提示する沼田充貴さん

第8回あきたの教師力高度化フォーラム

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生2年次 澤木 瑛保

令和元年12月18日に第8回あきたの教師力高度化フォーラムが開催されました。

新学習指導要領における評価の3観点のうちの1つである「主体的に学習に取り組む態度」の評価を適切に進めるため、その趣旨と具体について、中央教育審議会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員の佐藤真氏をお招きして、2部構成で基調講話と鼎談が行われました。

第1部では、『「主体的に学習に取り組む態度」の評価の趣旨』をテーマとする基調講話が行われました。育成すべき資質・能力に関わる「主体的に学習に取り組む態度」の重要性と、そのような態度が形成された子どもの姿を踏まえた、評価の在り方や進め方に関する豊かな示唆を得ることができました。教師は子ども一人一人の変容を単元全

体または教科を越えて丁寧に見取り、主体的な学習を子どもの実態に応じてサポートする役割があることを示すとともに、そのためのポートフォリオ評価の有効性や授業研究の在り方を提案してくださいました。第2部では、佐藤真氏に秋田大学の成田雅樹教授と佐藤学教授を交えて、『「主体的に学習に取り組む態度」の評価をどのように展開するか』というテーマで鼎談が行われました。問題の取り組み、振り返りの記述、活動の状況における、学習に対して主体的に取り組んでいる子どもの姿がいくつか取り上げられ、具体例から理論を捉えることができました。

子どもの個性や学力は多種多様であるため、同じ指導の場面でも一人一人の学習への取り組み方は異なるとともに、主体的に学習へと向かうよう

になるタイミングも異なり、そもそも「態度」は正確に見取ることが難しいと考えられます。教師はそれらを把握し、様々な場面で、様々な視点で、そして他の教師と協力して子どもを評価していくとともに、各評価方法について理解した上で、工夫を取り入れて指導に活かしていくことが大切であ

ると思います。

「主体的に学習に取り組む態度」はこれから一層重視される資質・能力であるため、今回学んだことを、現場で具体的にどのように生かすかを日々考えていきたいと思っています。



11月～1月の予定

2019年	11月	2日(土)	秋田大学大学院教育学研究科説明会
	11月	7日(木)	算数・数学指導力向上研修会(秋田県教育庁)
	11月	9日(土)	集中講義「学校学級経営の現状と課題」
	11月	12日(火)	国語指導力向上研修会(秋田県教育庁)
	11月	23日(土)	令和元年度秋田県学力向上フォーラム in 大仙市(秋田県教育庁)
	11月	26日(火)～29日(金)	言語活動指導者養成研修(教職員支援機構)
	11月	30日(土)	集中講義「学校危機管理の現状と課題」
	12月	7日(土)・8日(日)	令和元年度日本教職大学院協会研究大会
	12月	13日(金)	全県指導主事等連絡協議会(秋田県教育庁)
	12月	18日(水)	第8回あきたの教師力高度化フォーラム
	12月	21日(土)	秋田大学大学院教育学研究科第Ⅱ期入学試験
	12月	26日(木)	忘年会
2020年	1月	7日(火)	研究概要発表会
	1月	10日(金)	道徳教育パワーアップ協議会(秋田県教育庁)

今後の行事予定一覧

2月	4日(火)	教職実践オープンリフレクション事前発表会
2月	6日(木)・7日(金)	秋田県教育研究発表会(秋田県総合教育センター)
2月	14日(金)・15日(土)	第9回あきたの教師力高度化フォーラム
2月	21日(金)	宮城教育大学教職大学院と授業研究の交流会
3月	19日(木)	歓送会
3月	24日(火)	学位授与式



事情により発行が遅れてしまったことをお詫び申し上げます。